

地上の星

日没が近く、薄暗い。

周囲は田んぼ。

ここは水路の土手、
草で囲まれた土の道。

ひんやりとした風が、

土のにおいと、

草のこすれる音を運ぶ。

やがて辺りは暗くなる。

暗闇から一つの輝きが現れる。

二つ三つと増えていく。

光たちは空中を舞い、
仲間を集めている。

ホタルだ。

キリギリスの鳴き声、

コオロギの鳴き声の中で、
優雅に舞っている。

昼とは違う世界が広がった。

やがて光は姿を消し、
夜明けを迎えた。

ぶらねっとおぶじあーす

お父さんにねずみ色のぼーるをもらった。転がしたりして遊んだ。

転がしていたらぼーるが欠けてしまった。しょつく。

ぼーるが汚れて茶色になった。気になったから、僕の大好きな青色にぬりつぶした。

かぜをひいてしまった。くしゅん！ぼーるにくしやみがかかるところどころ色落ちしてしまった。青色の絵の具はなくなってしまったので、黄緑色でぬりなおした。きれいになった！

きんがぼーるについているとお父さんに言われた。お父さんがぼーるをまっ白にじょきんしてくれた。

最初からやり直したけど、たくさん色をぬり重ねすぎてぼーるが汚くなっちゃった。お父さんにあたらしいぼーるを買ってもらおうかなあ？

ガスと微粒子の集まりが衝突を繰り返し、地球が出来る。

地球の腹部に大きな流星が衝突。地球の一部が裂け、月ができる。

地殻が安定し、大地が形成される。ガスの雲の下で水蒸気が凝集し、海が出来る。

最初の原始生命が誕生する。(核酸の連結物(RNA)が偶然に出来、蛋白合成の道が拓けた説、隕石に生命の起源が混入していた説など)

大木の森林が広範囲に広がる。

恐竜が全盛期を迎える。しかし、巨大隕石が地球に激突して恐竜が絶滅し、多くの生物も絶滅した。氷河期が始まる。

哺乳類が繁栄する。中でも人類が飛びぬけた進化をみせ、文明を築き上げる。しかし一方で、公害など、環境問題が騒がれるようになる。

キラメキ戦士スター☆マン

「誰も見ずとも星が見る！スター☆マン、参上！」

子供の頃の夢だった変身ヒーロー、今俺はそれになっている。しかも本物の。犯罪者から無力な市民を守るヒーローだ。

「何、あの人……」「……頭おかしいんじゃない？警察呼ぼうよ」

……ヒーローだ。ここは閑静な住宅街にある公園。対峙しているのは悪の怪人。が、一般人に偽装している為、変身している俺は「変人」で、奴は「変」なのに絡まれた可哀想な人」としか見られていない。ヒーローなのに。

「くそっ！正体を現せ！正義の味方が変人でしか無いだろ！」

が、奴は正体を現さない。「変なのに絡まれた……うざっ」見たいな目で見てくる。さっさと正体を現してくれないと俺が変態だ。

「隠し通す気か……ならこっちから行くぞ！必殺！スター☆マンビーム！」

ちゅどーん。先手必勝。これで流石に向こうも正体を現すはずだ。

……あれ？倒れてる。そんなアホな、確かにあれは敵の怪人。そこは間違いない。ならなぜ起き上がって来ないんだ！

「ちゅっとそこの！何やってるんだ！」

「え!?警察!?違つんです！これは悪の怪人で俺はそれを退治しよう！」

「頭がおいしいようだな、ちゅっと署まで来てもらつぞ！」

「本当なのに！信じて下さい！って説得力ねえ！どうしよう俺！」

うわあああああ

「作戦は成功のようだな、博士。名付けて「一般人っぽい怪人を作ってスターマンをただの変質者に仕立て上げる作戦」！」

「そのようですな！流石は総統！」

「はっはっはっはっはー！」

ある信者の話

小学校の頃から、妹はやたらと占いが好きだった。

世間一般の女子の例に漏れることなく、妹は無類の占い好きだった。血液型に風水、手相に夢占いと、節操なくいろんなものに手を出しては結果に一喜一憂していた。とくに星占いが一番のお気に入りらしく、学校の行く前に毎日必ずニュース番組のそれをチェックすることが日課になっていた。

ただ、妹の少し変わっていることといえば、占いをとかく信じすぎているということだ。良い結果のときはいいのだが、悪い結果のときの落ち込みようといえなかった。ラッキーアイテムやラッキーカラーは、可能な限り全て持ち歩くようにしていた。少し行き過ぎのような気もしていたが、趣味のうちだろうと私は特に何も言わなかった。

だが、中学の頃になると、次第に妹はエスカレートしていった。

小遣いの大半を占いの本や風水のグッズにつき込み、何かの信者のようにそれらを妄信していた。占いの結果が悪いかと学校を休むのなんか日常茶飯事。色がダメだといって新しい服を捨てたり、方角が悪いといって出かけるのをやめたりと、段々と歯止めが利かなくなっていた。

一度戒めとして妹の部屋にある風水のグッズを隠したことがあったのだが、妹はまるでヒステリーを起こしたようパニックに陥った。謝ってそれを返したときの妹の怒り狂った表情は、未だに脳裏に刻み込まれている。

それから、妹の信仰心ともいうべき行動理念は悪化の一途をたどっていた。

風水的な位置がいい、という理由だけで、妹は都内の某大学に進学した。

手相を見た結果適切だといわれた、という理由だけで、妹はエンジニアになった。

血液型でも星座でも相性が抜群だ、という理由だけで、妹はとある男性と結婚した。

そんな妹を見ていて、私はいつも薄ら寒い気分になっていた。それはそうだろう。普通、人は上手く生きる手助けを得るために占いをする。しかし妹は、まるで占いのために生きているようにしか見えなかったからだ。妹は、本当にそれで幸せなのだろうか。

そんな妹が死んでから、すでに五年。妹の死因は自殺。享年三十二歳。遺書には自殺の動機は書かれていなかった。ただ、職場の同僚に常々「大厄を迎えるのが嫌だ」といっていたという。

私は今日もいつもどおり、妹が遺書に書いてまで選んだ、縁起のいい方角にある墓地の、縁起のいい色をした墓石の前に花を供えた。

帛琉

今年は、オリンピック、WBC、サッカーワールドカップなど、国際的なスポーツ行事が目白押しでしたが、その度に必ず見かけるもの、それが国旗です。オリンピックでは表彰台上れば国旗が掲揚されるし、WBCでは準決勝進出を決めた時、韓国がマウンドに無許可で埋めてみたり、とにかく国のシンボルとして国際的に使用されています。

日本の場合は言わずもがな日の丸です。正確には日章旗といいます。太陽が昇っていく瞬間を捉えたときとされる「日ノ本ノ国」として十分象徴になりうる旗です。

さて、国旗ですが、日本がデザインしている太陽のように、ほかにも星をあしらった国というのは多く存在します。じつに現存する約190カ国のうち40%の国旗には天体がデザインされているのです。

たとえば、星をデザインしている国は50を超えます。太陽などとの組み合わせも含めるとその数は60カ国。大体は、民族の数や州の数を表すのに使用されています。わかりやすいところだと、アメリカなんかは有名です。州が増えるたびに国旗が変わっていく様子を教科書で見た人は少なくないでしょう。他にも、ブラジルやオーストラリアなども星を使っている国です。社会主義国はほとんど星を使っていますし…… 本当に、挙げていけばきりがありません。

他にも、太陽は15カ国にデザインされています。もちろん、日本も含まれます。太陽は、繁栄、躍進などを意味しています。フィリピンやバングラデシュなどの国に使われています。

月をあしらっている国は、ほとんどがイスラム教関係の国です。イスラム関係の国の場合は、そのすべてが星と組み合わせられて使われています。これ

らの組み合わせがイスラム教での象徴だからです。

さて、日の丸そっくりな国旗を見つけました。それがミクロネシアにあるパラオの国旗です。こちらは、青地に黄色い円。中心はずれています。こちらもそのデザインは日の丸そっくり。この黄色い円は月を表しています。ちなみに、満月をあしらっているのはこの国のみです。

このパラオと言う国、実は日本語が公用語の地区があるほどの国であったりします。日本との関係はかなり良好で、首都同士の友好都市の関係を交渉しているほどです。というのも、戦中の占領統治の評判が大変よろしかったからだそうです。当時アメリカ領だったパラオを日本は奪ったのですが、ドイツ、アメリカによる統治と比べてあまりにも居心地がよかったからだそうです。当時作った神社なんかも自分たちで現在再建することもあるそうです。もちろん、戦時下統治については諸説あり単純には言及できませんが、このような国があるということも事実です。

さて、このパラオの国旗。実は日本の国旗がモチーフとなっています。1994年、パラオがついにアメリカから独立するときに国民に公募したもののなかから選ばれたものです。中心をずらしたのは、日本と同じデザインなんて恐れ多いからだそうです。こういうことがあると、まだ日本も捨てたものじゃないと思います。

今年は世界の国旗を見る機会が多かった年。国旗を通して日本だけじゃなくて、いろんな国について少しでも考えられたらと思います。いろいろな国同士で喧嘩とかをしていますが、どの国も同じ星に立っているんですから、国旗一つから尊重しあって、平和的に競い合って欲しいなあと思うわけです。それこそ、オリンピックとかWBCとかみたいです。

星の記憶

この半年、空は砂塵に霞み、星は姿を見せていない。嘆くべき異変に、しかし私は救われていた。

美しい星空は、忘れたいのに忘れられない記憶を、残酷に挟り出してはいたはずだから。

昔、ある男と出会った。

端的に言うなら「復讐の日を待つサムライ」。

堂々たる大人の男だったが、女性の扱いに不慣れで、その不器用さと裏表一体の誠実さに、私は惹かれた。

「戦いに生きる身に色恋は無用」などと意地を張る彼も、やがて私の想いに応えてくれるようになった。

夜空の下、私が星座を指差すと、それを題材にして、彼は詩才を披露してくれる。

私にこの幸せをくれた星空は、夢も抱かせていた。彼は戦いを忘れてくれている、という夢。

自分の理想のため彼が姿を消した、その日まで。

星々は打ちひしがれた私を嘲笑うかのように、前の日には見せていたその姿を、その日には隠していた。

心の傷を仕事で塗り固めようと躍起になっていた時、別の人と出会った。

その子供じみた性格に初めは呆れていたが、真っ直ぐな気性にやがて好感を抱くようになり、いつの間にか、彼と星を眺めることが楽しみになっていたのだから、我ながら不思議なものだ。

しかし、彼に対する恋心を自覚していくにつれて、私は既視感を覚えるようになった。

誠実で不器用な理想主義者と、二人で星を見る幸せ。彼が、一見正対だった前の男と、その実似ていることに気付き、ある予感が鎌首をもたげた。

この幸せにもいつか、彼が一方的に終止符を打ってしまうのではないかと。

その恐怖は、彼との幸せが大きくなるにつれて、否応なしに視界を覆う闇へと育っていった。

そして、彼もまた、討つべき敵を追う身であったという事実が、その闇を一層濃くしていた。

その敵こそ、私が以前愛したあの男だったのである。彼と眺める星の海の美しさが、酷薄に感じられた。

―才前ノ幸セハ、コノ星々ノヨウニ輝ク。

―ダガ、ソノ輝キハ束ノ間デ、イツカハ消エル。

―残ルノハ、無限ニ続く闇ダケ。

恐れていることは、必ず起きるもの。

二人の男は、私の目の前で、相見えてしまった。

あれほど幼く感じられた彼が、一人前の兵の表情を見せ、遥かに上手だった敵に傷を負わせている。

もう一撃放てば、彼は敵を討ち取れた。

そうすれば、彼は戦いから、私は幸せを失う恐怖から、それぞれに解放されただろう。

なのに、私の身体は、彼の敵―私がかつて愛した男を護るように、二人の間に割って入った。

そして、自分を捨てた男の身体を支え―今愛する男に背を向け、その場を去った。

「戻れ！来てくれ！」

背後で私を懸命に呼ぶ彼の声が、絶望の叫びに変わるのを聞きながら。

「私には、こうする他になかったわ」

何故自分を助けたか、という昔の男の問いに、私は傷の手当をしながらそう答えた。

愛する男が、人殺しにならないためには、あなたを救うしかなかった、と。

昔の男は暫く黙っていたが、手当てが終わると突然、「すまん」

と、かつて行方をくらました日にも言わなかった謝罪の言葉を口にし、次の刹那、私に当て身を叩き込んだ。意識が暗転する中、それでも私は、彼が再び戦いに赴くつもりなのだと思った。

昔の男はその後、やはり理想とやらのために戦い、そのまま死んでしまった。

私にも、何も残らなかった。

自分の幸せに終止符が打たれるのを恐れていたが、結局は、過去に囚われた自分の方が、あれほど自分を想ってくれた人の幸せを消し去ってしまった。

「愛する人に人殺しになって欲しくなかった」などという弁明が、今更通用するはずもない。

もし彼の敵が私の昔の男でなかったら、私が割って入ることなどなかったのだから。

もはや彼は、自分を裏切って、自分の敵を庇いだてした私を、許してなどくれないだろう。

この半年、空は砂塵に霞み、星は姿を見せていない。

嘆くべき異変に、しかし私は救われている。

美しい星空は、決して戻らない過去の幸せ。

絶望に満ちた今となつては、忘れたい記憶。

鋼鉄男爵伝説

おかーしおかし、あるところに、鋼鉄男爵という鋼の肉体を持つ心優しいけと後先考えない無鉄砲な男がおりました。

あるとき鋼鉄男爵は、隣村の空が、最近謎の暗雲で覆われ、きれいな星が見えなくなっていましたといううわさを聞きつけました。なんとか村の人たちに星を見せてあげたいと思った男爵は、大きな金槌を手に村へと向かい、村人たちを集めてこう言いました。

「今から私が、この鋼鉄の体を以て、この村の空を満天の星空に変えてやろう」すると男爵は、持っていた金槌を大きく振り上げ自分の頭を思いっきりぶったきました。

ガキーンというものすごい音とともに男爵の頭から火花と星が飛び出しました。男爵はさらに何回も何回も自分の頭を叩き、そのたびに星が飛び出していきました。そして飛び出していた星は空へと舞い上がり、村の空は満天の星空となりました。

村人たちは男爵の行動に始めはびっくりして、心配そうに見守っていましたが、一面の星空を見ると大喜びして、歌い踊りました。

ところが、流石の鋼の肉体を持つ鋼鉄男爵も、あまりに自分の頭を叩きすぎたせいで、脳みそが揺れすぎ気を失って倒れてしまいました。

いくらなんでも生身の人間の頭を叩き続ければどうかしまうことは考えれば分かりそうなものなのですが、村人たちも男爵も飛び出す星に夢中になりすぎてしまったようです。倒れた男爵を見た村人たちは大慌て。なんとか男爵を起こす方法はないかとおたおたしていたところ、いまや沢山の星が浮かぶ夜空に一筋の光が！「そうだ、流れ星にお願いしよう！」

村人たちは夜空に流れ星が見えるたび男爵が目覚めるよう祈りました。

すると、夜空に浮かんでいた星が、いっせいに地上に降り注ぎ、そして男爵の体に吸い込まれていきました。全身に星を浴びた鋼鉄男爵は不死鳥のごとくよみがえり、そして何事もなかったかのように村を去っていきました。

以来その村では、星を呼ぶ鋼鉄男爵の伝説が語り継がれているとかいらないとか。

farewell star

カアーン……。いい音だ。これは、真芯に当たった音。ゆっくりと僕が振り返ると、その白球は黒の上に緑の文字が踊るボードにかつんとぶつかった。観客の歓声の波がどおっと押し寄せる。僕はその波にゆっくり飲まれながら、目を閉じた。逆転満塁サヨナラホームラン。……劇的じゃないか。

僕の星には、また黒がついた。

「やめようと思うんだ。」

そして試合も終わりがかなり重苦しい反省会を済ませ、いつもの場所に来ると、僕はそう切り出した。

「……もう、野球を。」

隣にいてくれる彼女は黒くて長い髪を少し揺らして僕の方を見た。

「どうして？」

「最近の成績を見れば、わかるだろう？」

もう、夏も終わる。風もそろそろ冷たくなってきた。来シーズンも出来るとは思えない。格安の年俸でやるよりは……戦力外通告をされるよりは……その前に、自分から終わりを切り出した方が、球団的にも、自分的にも、いいんだ。僕の言葉を聞くと、彼女はそっと手を伸ばして僕の右肩を摩った。

「……壊れてるでしょ。」

僕は弾かれたように顔を上げ、彼女の顔を見た。暗くて彼女の顔が見えない。公園のベンチの上じゃ、街灯がゆるくオレンジに辺りを照らす程度である。しばらくの沈黙の後、声を絞り出すように発した。

「なんで、わかった？」

「どれだけ、あなたを見てきてると思ってるのよ。」

生まれたときから側にいて、ずっと支えてくれた。自分の受験のときも僕の部活のために弁当を作ってくれたり、ずっとずっと世話をかけてきた。フロに就任して、ようやく、楽させてやれると思ったのに。

「……ああ、壊れてる。」

この肩に異常を感じ始めたのは昨シーズンの最後からだ。誰にも言わず医者に行ったが、医者は静かに首を振った。「もう野球は諦めた方がいい。」物心ついたときからずっと酷使してきた肩はいつの間にかぶち壊れていた。きつと壊れてからも使い続けてきたのだから。もう、治す術など、何処にもなかった。

「ごめん……苦勞ばかりかけて。」

「何言ってるのよ、たった一人の……家族でしょう？」

彼女は静かに微笑むと、左手を僕の背中に回し、右手で肩を摩りながら、ぎゅっと僕を抱きしめた。

「かわいそうに……誰よりも、野球が好きなのに。」

彼女が泣いていることに気づいて、僕は、ようやく全てを実感した。

僕が全てを賭けてきたことがもうなくなるんだ。僕は精一杯努力した。全てを切り捨てて努力した。それでも懂れていた選手の足下にも及ばないまま、努力とはどうにもならないところで僕の愛した野球との人生は終わるんだ。初めてバットを振ったときにまるでバットに振られたようにぐるりと回り地面に転げ落ちたことも、初めての試合でいきなりノーヒットノーランを成し遂げて監督に頭がぐちゃぐちゃになるまで撫で回されて「お前は天才だ！」と言われたことも、誰よりも早く朝練に行き誰よりも遅くまで練習していたらいつの間にかみんな集まるようになったことも、野球と関わらなかつたら生まれなかつた記憶だ。それが、もうただの思い出になり、そこから繋がって行く道はもうないんだ。

あのひとときわ明るい星。見たことあると思ったら、ほら、あれだ、初めて打ったホームランと同じ色をしてないか？　なあ、こんなに白球があるのに、どうして僕が投げて打てる球は、もうないんだ？

つう、と僕の頬を熱いものが流れる。ああきつと、野球を想って泣くのはこれが最後だろうな。僕はやめるんだ。やめなければいけないんだ。……もう、野球を。

間違い

月夜に浮かぶ宇宙船の中でタコに似た生物が話し合っていた。

「この星の環境は素晴らしい」

「この星をいただき、我々の新たな住処にしよう」

「まず、人間と言う生物は、邪魔なので退治してしまおうか」

彼らは、武装し物寂しげな川のほとりに降りました。

「お、あそこに人間がいるぞ」

「よし、手始めにアイツからだ」

彼らは、持っていた銃で相手を打ちました。しかし、相手は、全く効いた様子がなく、何かをしきりに呟いていました。

「変だな？効かないぞ」

「じゃあ、これならどうだ」

彼らは、持っている全ての武器で、攻撃しました。しかし、やっぱり結果は、同じでした。

「これは、ヤバイ」

「兎に角、撤退だ」

彼らは、慌てて地球から去っていきました。

静まり返った川のほとりでは、「うらめしやー、うらめしやー」という小さな声がしました。

*When you wish upon a star
Make no difference who you are
Anything your heart desires
Will come to you...*

彼と聞いたそのやわらかいメロディーを
私は絶対にわすれない

星に願いを

くらい道をひとり、ゆっくりとあるく。とてもほそい道で街灯もないけれど、私には月明かりで十分だった。いつものおさんぽではとまらない道。見た目も、においも、足に伝わるザラザラもちがう、はじめての道。そして、たぶんもう二度と通ることはない道。

§
どたばたとあしおとがする。うるさい。私は耳をふせて、もっとまるくなった。

「遅刻っ！ 遅刻するからマジでー」

聞きなれた声。毎朝毎朝、うるさくてたまらない。私は眠いんだからじゃましないでほしい。

「んじゃいつていまーす」

私にかけてくれた声には、一応しっぱをふって返す。昔なら鳴きながらたくさん甘えたのだろうけれど、近ごろはそんな元氣もなくなってきた。

もうここに住んで十四年になる。はじめて彼と会ったときのことはいまだ覚えていない。けれど、彼に抱っこしてもらうと、いつもお日さまのにおいがしたことだけは覚えてい

うーん、とのびをしてみる。今日もやっぱりからだは重たい。そういえば、なんだかすごくおながすいた。きのうまで全然すかなかったのに。

しょうがない。めんどうだけど、起きあがるか。

§
くらくてほそい道。このまま歩けばどこに行くのかなーなんて思うけど、もうそんなに歩けそうにない。私はちよっと立ち止まることにした。

ぼんやりとした月明かりの下、毛をつくるう。昔とはちがう、つやの無いぼさぼさの茶毛。舌にからまる毛もおおくて、毛玉がつくりづら

い。吐きだすのがむずかしい。

数えきれないほど彼になでてもらったあたま、おなか。毛づくろいなんかより、ずっと気持ちよかったな。

§
食べものは、台所のいつものところに置いてあった。私用のお皿に、私用の食べもの。においをかいて、一気に食べる。……おかしい。食べてる気がしない。

結局、皿の上のものが全部なくなっても、全然おなかはいっぱいにならなかった。へんだ。

とりあえず、ひと眠りしよう。すこし開いていたマドから外に出て、私はまたまるくなった。

§
彼が、きらきら光るまるいものを持っている。

新しいおもちゃだと思って飛びつこうとすると、彼はあわててそれをかくした。

——だめだよー、これレンタルなんだから。

よくわからない。私が首をかたむけると、彼は笑って、そのきらきらを黒いハコの中に入れた。

キュルキュルと小さな音がしたあと、ゆっくりとメロディーが流れてきた。

——これは、星に願いを「って曲なんだ。

——星に願いを懸けるとき、

誰だって心を込めて望むなら、

きつと願いは叶うでしょう——だってさ。

ほっとする、やさしい音。なんだかねむくなって、私はあくびをした。

——お前はとりあえず寝たいのな。うん、俺も眠いわ。それは、とおいとおい思ひ出。おふとんのなかでいっしょに眠るのを、彼がはじめて許してくれた、幸せなじかん。

§
目がさめると、口のまわりがよごれていた。まっかな水が、さつき食べたものといっしょに地面に流れていた。

なんとなくわかった。もう行かなきゃいけないんだって。

§
「にやー」

「うわっ、なんだお前。今夜はえらく甘えてくるなあ」

「にやーにやー……にやーん」

§
くらくてほそい道。見上げると、星空が広がっていた。

もう家にはかえらない。それがネコのきまり。だれに聞いたかわすれたけれど、たしかにだれかがそう言っていた。

昼間見たゆめを思いだす。お星さまにねがえば、私のようなネコのねがいもかなうのかな。

§
深夜、月明かりが微かに照らす路地裏で、一匹の猫が夜空に向かって鳴いている。それは小さな小さな、けれど、強い強い鳴き声だった。

§
私のねがいは、一つだけ。おねがいですお星さま。どうか私にコトバをください。どうしてもつたえたいことがあるんです。ずっと言いたかったことがあるんです。

*

ずっとずっとあいしてくれてありがとう。

ほんとうに、だいすきです。

10のきらめくスターたち

お好きな作品はどれですか？

そして60名の東工大生が選んだのは？

「補足資料」にて

- ・セッションの結果と全作品講評
 - ・本選行きを逃した「惜しい」作品
- をお楽しみください。